

ジエミイの冒険

片山広子



むかし、フアネットの田舎に、ジェミイ・フリールという青年が母と二人でくらしていた。後家である母はむすこだけをたよりにしていた。むすこはその頼もしいうでで母のため一生けん命働らき、毎土曜日の夜になると、かせぎためた金を母の手にそっくり渡してじぶんは半ペニイのお小づかいをありがたくだいていのだった。こんな孝行むすこはひろい世間にも二人とはいないと近所の人たちからほめられていたが、ほかにジェミイのことをよく知っている人たちがいるのだった。それはかれが見たこともない、五月祭の前夜か萬聖節の時でなければ人間の眼には見られない人たち、つまり妖精たちである。

ジェミイの家からすぐ近くに、くずれかけた古いしろがあつて、「小さい人たち」すなわち妖精の住家だといわれていた。毎年萬聖節の前夜になると、古い窓には明るく燈火がついて、しろの中をあそびまわる妖精たちの小さいすがたが道ゆくものにもよく見えて、パイプや笛の音も聞えてきた。それが妖精たちのえん会なのはみんなが知っていたけれどだ

れもその席にはいつて行く勇氣はなかつた。ジェミイは遠くから小さい人たちのすがたをながめ、美しい音楽をきいてしろの内部はどんなようすだろうと考えてみたりしたが、ある萬聖節の前夜、かれはぼうしを手にして母にいった。

「母さん、ぼくはいい運をさがしに、おしろにいつてみます。」

母はおどろいて、おしろにどんなこわいことがあるかもしれないととめたけれど、だいじょうぶ、すぐ帰つてきますといつてでていった。

いも畑をつつきると、もうそこにしろが見えた。窓々にはあかあかと燈火がついて、夜の林の木々にまつわるかれ葉も黄ろく金いろに見えていた。木立のかげにたつてジェミイは妖精たちのえん会さわぎをきいていると、わらい声や歌の聲がかれをさそいこむのだった。小人たちの一ばん大きいのも五つ位の子どもの大ききで、小さいみんなが笛や胡弓の調子にあわせておどっている。おどつていないものは飲んだり食べたりしているのだった。

小人たちは新しいお客を見ると、みんながよん

だ。「ようこそ、ジェミイ・フリール！ ようこそ、ようこそ！」このようこそ、その声が傳わつてしるじゅうのみんなが「ようこそ」といいあつた。

時間がたつて、ジェミイは愉快になつていると、主人がわの妖精がいった。「われわれは今夜ダブリンまで遠乗りして、おじょうさんを一人ぬすんでこようと思うんだ。一しよにゆかないか、ジェミイ・フリール？」

「うん、ゆくよ。」

数頭の馬が入口にたつていて、その一つに乗ると、馬はすうつと空中にとび上り、妖精たちの一隊と一しよにもうすぐジェミイの母の家の上をとびこえて、高い山や低い山もどんどんとびこえ、深い湖もこえて、町々や村々の上をとんで行つた。地上の人たちはたのしい萬聖節のお祝いにたき火で「くるみ」を焼いたり、林ごをたべたりしているのだった。アイルランドの國じゆうをとびまわるのかとジェミイが思つていると、デリーの市にきた。お寺の高い塔の上をこえるとき、「ここがデリーだよ」と一人の妖精フェアリーがいうと、五十人もの小さい声が「デ

リー、デリー、デリー！」とくりかえしてさけぶのだった。

とちゆうのどこの市にきてもジェミイはいちいちその名を教えられて、やつとのことダブリンにつくと、銀の鈴のような小さい声々が「ダブリン、ダブリン、ダブリン！」と教えてくれた。

妖精たちの目あての家はステイヴンスのおかのりつばな住宅の一つだった。かれらが窓の近くで馬をおりと窓のなかのりつばなベッドにねむつている美しい顔がジェミイにみえた。妖精たちはおじょうさんをだいて外につれだし、その代りに一本のぼうをベッドにおくと、それがおじょうさんのすがたに變つた。

一人の妖精がおじょうさんを自分の前にのせて少し行くと、またべつの妖精にわたし、ゆくときのおりに町々の名をよびながら馬を走らせる。だんだん自分の家の近くまでできたことがわかるとジェミイはいつた。

「みんなが代りばんこにおじょうさんを乗せているね、ぼくも、ちよつとでも乗せてあげたい。」

「よろしいとも、お前もおじょうさんをのせてあげな。」妖精たちがきげんよくジェミイにいうので、

ジェミイは大事なおじょうさんをしっかりとかかえて、いきなり、母の家の入口にとびおりてしまった。

「ジェミイ・フリール、ジェミイ・フリール、こすいことをするな！」フエヤリ妖精たちは怒つてみんなが一しよにとびおりた。

ジェミイはしつかりおじょうさんをだいていた。

ここまでくるみちみち妖精フエヤリたちはいろんなすがたにおじょうさんを変えたので、ジェミイはいま何をだいているのか自分でも知らない。一度は黒犬になつて、かみつこうとした、つぎにはまつ赤な鉄のぼうになつたが、すこしも熱くなかつた。ジェミイが生けん命におじょうさんをかかえていたので、妖精たちはあきらめて立ちさろうとしたとき、小人のなかの小さい女がさげんだ。

「ジェミイ・フリールはおじょうさんをとつてしまったけど、いいことはないよ。私は、おじょうさんをつんぽのおしにしてやる！」そういつてかの女じよは何かをおじょうさんにふりかけた。

妖精たちは失望してさつてしまうと、ジェミイは家のかけ金かねをはずしてはいつた。

「まあ、ジェミイや、妖精たちはどうしたの？」母は心配したが、むすこはへいきだつた。

「母さん、とても運がよかつたよ。母さんの話相手にこんなきれいなおじょうさんをつれてきた。」

母はおどろいて「まあ、まあ！」というだけだつた。ジェミイは今夜のできごとを話して、おじょうさんが妖精たちにつれて行かれて、まよい兒になつてはかわいそうだから、助けてきたといつた。つんぽのおしのおじょうさんはうすいねまきで寒そうにふるえながら火のそばによつていた。

「かわいそうに、おとなしいきれいなおじょうさんだね！ こんな貧ぼうな家でも、何かきせてあげるものはないかしら？」母はしばらく考えて、自分の寢部屋にいつて、日曜日の教会ゆききる茶いろの外とうをだした。それから別のひきだしから、白い靴下や、雪のようにまつ白いリンネルの上着と白いぼうしをだした。おむかえぎといつて長い前から用意された死衣しゐのようなのだが、母はおしげもなく

それをおじょうさんにさせると、おじょうさんはだ
まつてきせられて、それからろのそばのこしかけに
しずみこんで、両手で顔をかくしていた。

「あなたのようなりつばなおじょうさんを、私たち
が養つてゆけるかしら？」母は心配したが、ジェミ
イはその日から、お母さんとおじょうさんのために
むちゆうになつて働いた。おじょうさんはそれから
も長いあいだ悲しそうにしていたが、だんだんジェ
ミイの家の生活になれてくると、ぶたの世話をした
りにわとり、のえをやつたり、古い毛糸でソックスを
あんだりするようになつて、一年の月日がすぎた。
また萬聖節の祭日がまわつてくると、ジェミイはほ
うしを持つて母にいった。

「母さん、ぼくはいい運をさがしに、もう一度おし
ろに行つてきます。」

ジェミイは去年のとおり林ごの木立のかげにたつ
て、窓のなかの明るい燈火をながめ小人たちのさわ
ぎをきいていると、中ではかれのうわさをして「去
年はジェミイのやつがひどいことをしたね、きれい
なおじょうさんをさらつて行つて」と一人がいつて

いる。すると小人の女が「だから私がしかえしをし
てやったのよ。あのむすめはつんぽのおしで何もで
きはしない。私のこのコップの水を三てきだけ飲ま
せれば、すつかりなおるんだけど、ジェミイはそん
なこと知らないんだ。」

ジェミイは心がおどるようで、内にはいつて行く
と、妖精^{フェアリー}たちは声をあわせて歓^かげいした。

「ジェミイ・フリールがきた！ ようこそ、ジェミ
イ、よくきてくれた！」その歓^かげいの声がしずまる
と、小人の女がコップをだした。

「ジェミイ、私たちの健康を祝つて、このコップか
ら飲んでね。」

ジェミイはコップを取るがはやく入口をかけたし
た。まるでむちゆうで、走つて走つて家にとびこむ
と、ろのそばにしりもちをついてしまった。きちが
いのようにいも畑をかけてくるときコップの水がこ
ぼれてしまつたけれど、まだすこし残つていて、三
滴の水を大いそぎでおじょうさんに飲ませてあげる
と、おじょうさんはすぐに口がきけて、まずジェミ
イのしんせつのお礼をいうことができた。

朝になつておじょうさんは紙とペンとインキをだしてもらつて、ダブリンのお父さんに手紙を書いた。だが、その返事はこなかつた。何度も手紙をだしても返事がないのだった。

おじょうさんはダブリンまで一しよに行つてくれとジェミイにたのんだが、ジェミイはダブリンまで馬車をやとうお金がなかつた。とうとう二人はダブリンまで歩くことにして、遠い道を歩いていった。

ステーヴンスおかのお父さんの家では取次の下ばかりがでてきて「この家にはおじょうさんはありません。一人いらつたのですが、去年なくなりました」とこのおじょうさんを内に入れようとしなかつた。おじょうさんがお父さんかお母さんに会わせてくれとないてたのむので両親がでてきたけれど、「うちのむすめはもう一年も前に死んでほうむられてる。お前はかたりだろう」とどうしても受け入れてくれない。一年前にほうむつたむすめのことを考えると、どんなによくにいても、かれらにはどうしても信じられないのだった。

「みんなが私をわすれたのね！ 母さん、私のくび

の『ほくろ』を見てください。私がわかりませんか？」母はそういわれてようやく自分のむすめだとわかつたけれど、おかんに入れてほうむつたむすめのことかどうにもふしぎに思われた。それでジェミイは去年の萬聖節の夜のぼう険から、おじょうさんが三滴の水の力で救われた話もきかせた。

おじょうさんはジェミイ母子おやこがどんなにしんせつにしてくれたかも話したので、両親は、どうしてこのお札ができるでしょうと、心から感謝するのだった。ジェミイが帰ろうとすると、おじょうさんは一しよに行くといひだした。

「ジェミイは妖精フェアリーの手から私を救つていままで世話をしてくれました。生きていてお父さんお母さんに会えたのもジェミイのおかげです。私は一しよに帰ります」

かたく決心しているので、それでは、ジェミイをおじょうさんのむこにしようとお父さんがいいだし、ジェミイのお母さんをりつぱな馬車でよんできて、すばらしい結こん式をした。

それから、ダブリンの家でみんな一しよにくらし

て、お父さんがなくなると、ジェミイとおじょうさんと二人がお父さんの財産をゆずられたのであつた。

底本：「世界の子供」世界文学社
1949（昭和 24）年 8 月号

入力：匿名

校正：館野浩美

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。